

# 『国語総合』（古典学習）の授業開発（高校教育シンポジウム報告）

## — 「1年生国語総合『和歌』の知識の習得と活用」 —

国語科 横井 健、戸田康代、岩崎知博、川瀬英幹、竹内美奈子、渡邊寛吾

現行の学習指導要領の改訂に伴い、「国語総合」が必修科目とされたことで、高等学校教育における「国語総合」の果たすべき役割がこれまで以上に大きくなってきた。中でも古典分野は、我が国の言語文化を享受し、継承・発展させること等に重点を置いて、授業内容の充実がはかられてきているところである。全ての高校生が身につけるべき古典の力とはどのようなものかを検討し、古典（特に古文）の面白さを伝えるとともに、基礎的な知識をいかに習得させ、活用へと導いていったらよいか、言語活動を通じた指導の実践報告を行う。

<キーワード> 国語総合 言語活動 古文学習 和歌

### 1 はじめに

現行学習指導要領に明記されている〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕では、読む・書く・話す聞く3領域相互を関連させた指導と評価とが重視されている。平成25年度に国立教育政策研究所から提案された「21世紀型能力」、そして次期学習指導要領改訂に向けた「論点整理（案）」（文部科学省・教育課程企画特別部会 平成27年8月20日「補足資料」）では、さらにアクティブ・ラーニングを活かした思考力・判断力・表現力等（活用・統合型能力、汎用性）を育成する授業・評価開発も期待されている。以下は、これから求められる〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕を、高等学校で授業化した、一つの実践の報告である。

今回の高校教育シンポジウムの研究授業では、高校1年生『伊勢物語』の学習を例に「和歌」の知識の習得と活用の方法から「古典」の指導のあり方について提案した。その際、「和歌」創作に必要な知識を定着させる方法、習得した知識を活用し個々の生徒が「情景や心情の描写を取り入れ」（学習指導要領「国語総合 B 書くこと（2）ア」）、表現する実践例を示した。その後の研究協議会の場では、課題設定、カリキュラムマネジメント、指導と支援、評価方法等のあり方について多面的な議論がなされ、多くの示唆を得ることができた。

### 2 研究の目的 — 歌物語（『伊勢物語』）の魅力と「習得・活用」学習の重視 —

従来の『国語総合』において、古典分野（なかでも古文）の学習は、古文単語の学習や文語文法の習得、あるいは和歌の修辞について、授業者が「正しい」用法を解説した上で、ペーパーテストで評価を下し、一応の完成を見するという知識注入型の一斉授業が主たる方法であったと経験的に感じている。学習指導要領「国語総合」の「C 読むこと」の解説の「古典の学習は、古文、漢文の現代語訳や文法的な説明に終始するものであってはならない」との記述や「古典A」の目標の解説に「訓詁注釈に偏った古典の授業が古典の学習に意義を見いだせない生徒を生まないように、古典を読む意欲をまず高めることが何よりも大切である」との文言があることも一つの証左となろう。このような授業のままでは「1 はじめに」で述べたような、時代の要請に合う意味での生徒達の人間的で深い学び

や主体的・能動的な学びを構成するような文化の継承と創造・アイデンティティの確立につながる古典学習、言語の教育としての古文学習とは言いにくい面がある。また、一斉授業と定期考査による評価だけでは、生き方や判断力にも関わる「表現する力」を測ることも難しい。ペーパーテストに限らずにこれまでも部分的に行ってきたパフォーマンス課題(評価)・ポートフォリオ評価等も再度見直し、多様で本質的な評価をするための工夫の一端を示すことが本研究の目的の一つでもある。

また、現行の学習指導要領においては、古典教材の学習を通して「我が国の伝統的な言語文化に対する生徒の興味・関心が広がり、外国の言語文化を理解する心」(p.24)を養成することを国語教育に求めている。さらに、各教科における言語的・文化的なアイデンティティ育成との関連(理科・社会・数学、家庭科、美術・音楽科目等)、外国語教育(英語教育)等との教科横断的なカリキュラムマネジメント等も重視されている。このようなことを踏まえ、今回のシンポジウムでは「国語総合」における『伊勢物語』を例にしながら、以下に示すような研究実践を提案した。

(1) 高校3年間の系統的なカリキュラムのなかで「共通必修科目」として位置づけられた『国語総合』の位置、役割を重視した授業開発と工夫を行う。

古典を学ぶ楽しさ、習得・活用・探究的な学びが特に、伝統文化理解(異文化相対化)・日本人としてのアイデンティティ確立の基盤につながるような視野から、今回の古典学習の開発を行う。

(2) 同時に、全教科・活動の基盤としての国語科授業に従来から強く求められている、「他教科学習の基礎・基本」「社会人として必要な国語の能力の基本」を育成する等の役割を重視した授業開発を行う。

(3) 現行の学習指導要領の改訂で重視されている以下の4点について授業・評価開発を行う。なお、以下の項目は次期学習指導要領に向けた「論点整理(案)」でも重視されており、授業化が期待される事項である。

①多様なテキスト・情報理解の育成・批評能力を育成するためにテキスト形式の理解・読解と批評ができるようにさせる。参照「C 読むこと」「エ 表現の仕方を評価すること、書き手の意図をとらえることに関する指導事項」。

②『伊勢物語』の読み方(表現の型・構成)や日本における文化的意味を理解し、自分の考えや解釈も持ち方、古典文学におけるテキスト形式への批評の視点を持たせる。参照「ウ 表現に即して読み味わうことに関する指導事項」「エ 表現の仕方を評価すること、書き手の意図をとらえることに関する指導事項」。

③和歌の修辞法の理解と和歌の創作活動を通じて、歌物語の特色や表現の特質を読み取り、他の古典作品と比較・批評できるようにする。参照「(2) 言語活動例」の「C 読むこと」「ア 古典の物語を現代の物語に書き換えたりする言語活動」「エ 読み比べたことについて、感想を述べたり批評したりする言語活動」。および「B 書くこと」「ア 情景や心情の描写を取り入れて、詩歌を作ったり随筆を書いたりする言語活動」。「学習指導要領解説」によれば、『『詩歌をつくったり随筆などを書いたり』することは、文学的な文章を創作する言語活動であり、小学校及び中学校を通して一貫して取り上げている。それを踏まえ、高等学校においては、物事を見つめ、思考し、想像し、構想し、それを表現する活動の一層の充実が大切となる。そこで、『情景や心情の描写を取り入れ』ることを前提としている。」(p.22,23)それゆえ、本提案では、和歌の創作にあたって「本文の情景や信条の描写を取り入れ」ることを求め、例えば「折り句」の技巧にとどまらないことを期待した。

④中学校までの学びをふまえ、既習の知識・技能等を活用しながら主体的・批評的に古典教材を読

めるようにする（小学校高学年・中学校における古典学習を踏まえた系統的指導）。

- (4) 高校における教育課程（カリキュラム）を踏まえ、古文を読み考えることの楽しさと方法・評価等について、特に習得した知識の活用・探究の支援につながる授業構想を開発提案する。その際、「過去のあらゆる時代の人々が古典に親しんできた、その親しみ方について教えるという視点」（千野浩一 2015）に留意する。

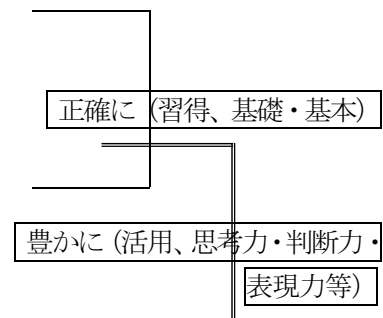
### 3 研究の過程および実践、そのポイント

- (1) 古典（古文）学習における学びのポイントと評価規準（基準）

一【物語（文学的な文章）】の読み方の習得（基礎・基本）・活用（思考力・判断力・表現力等）、探究的・協働的な学びから評価・メタ認知（学びの一般化）へのステップ—

- ・学びの楽しさと意欲化、教科の本質（専門性）に根ざした深い学び…学び探究しつづける生徒像
- ・共感・共有できる学級・人間関係、自己・情報・世界との「対話」…学びを生き方につなげる力
- ・報告や質疑応答、プレゼンテーション等の力…協働的・協調的な学びによる知識・生き方の創造

- |              |                     |
|--------------|---------------------|
| ①状況設定の理解     | 登場人物・舞台・時代背景等       |
| ②構造をとらえる     | 場面構成／問題の発端は何か       |
| ③中心人物の変化と解釈  | はじめと終わりの変化、きっかけ     |
| ④対比的人物の役割と位置 | 中心人物との関係・役割、効果等     |
| ⑤古文特有の描写と方法  | イメージの描写と効果、象徴性等     |
| ⑥主題に対する解釈    | 自分の立場からの解釈・批評等      |
| ⑦発信・交流（学び合い） | 創作・発表、討論等による深化      |
| ⑧自己評価・一般化    | まとめと他教科・生活・人間関係への展開 |



（メタ認知と汎用的な資質・能力への展開…各教科学習とのリンク、道徳、読書力、人間関係、生き方）

- (2) テキスト形式の理解と批評（読解～「考え、解釈」を持つ）—学習シートの開発と活用—

古典学習の目的と評価規準（基準）に応じた学習シートを開発することにより、単元全体のなかでの各授業時間における学習到達目標（評価規準・基準）を明確にする。また、生徒にとっての学習方法モデルを目に見える（振り返りができる）ように提示する。

ここでの学習シートとは、本質性と汎用性を併せ持つような学び方の方法と評価観（学習方法モデル）をシンプルに示したものであり、各テキスト（ジャンル）固有の特質に合わせて作成してある。また、論理的な表現力（論述・論文化）の技術的育成への対応も考慮してある。なお、いつもこのように多くの学習シートを開発・使用しなければならないとの提案ではないことをお断りする。授業時間数・授業目的と生徒の学びの実態等によって、これからの古典学習をよりシンプルに構想する、また全員に楽しく定着させる、さらにレベルの高い能力・資質（学力）を向上させる…といった学習過程論（授業過程論）や単元構想を焦点化するための一つの提案である。これらは次期学習指導要領で改めて教員個々の能力として重視されたカリキュラムマネジメントの構想につながる視点でもある。

今回の研究ではモデル的に、以下のような学習シートを開発してきた。概略を述べる。

- ①『伊勢物語』のテキスト形式の特質を理解させるシート…本質を踏まえた読解から解釈、批評・創造へ
- ②中心人物と対比人物等の人物（心情）理解のためのシート…人物像やメッセージ理解の基礎・基本
- ③現代語訳を通しての原文を正しく理解し検討するためのシート…テキスト・文脈、構造等の理解と解釈
- ④日本語論としての古文特有の注意すべき語句を確認するためのシート…現代日本語の位置と構造、変遷
- ⑤それぞれが創作した和歌を比較し、主題を理解するためのシート…批評的・創造的な行為と意義

の理解を開発した。

学習シートについて、①～④については、「愛知教育大学附属高等学校研究紀要 第40集」(2013年3月)を参照。⑤は後掲。

### (3) 実践例

(例)『伊勢物語』「あづま下り」(6時間)

①導入・基礎学習(1時間)	範読・音読、場面分けを通して、歴史的仮名遣いや基本古語の確認
②基本学習(2時間)	「あづま下り」の正確で十分な理解(場面構成の理解、中心人物の心情変化の確認、対比人物の理解と比較、主題、批評性)
③発展的学習(2時間)	(和歌の創作と話し合い) ※ シンポジウムでの実践
④評価・一般化学習(1時間)	学習全体のまとめと一般化(発表と交流・振り返り)

「伊勢物語」の学習は、「あづま下り」の他、「芥川」、「筒井筒」、「あづさ弓」を扱い、「筒井筒」では現代語訳の扱いについて、グループ学習を実施。「筒井筒」の学習についての詳細は「愛知教育大学附属高等学校研究紀要 第40集」(2013年3月)を参照。

### (4) 授業参加生徒の意見(下線は引用者)

授業活動について

和歌の創作

○その場面の状況を想像して詠むことができた。他の古典物語でも創ってみたいと思った。(男)

○単純に楽しかった。こんなことは授業じゃないと絶対にやらないことだし、正直やろうとは思わなけれど、やってみると楽しくて「ここをこうしてみよう」とか考えて自分の和歌をどんどん推敲してよくなっているのが分かるので、うれしかった。これからも和歌が出てきたらいろんなことを考えて読みたい。(女)

○折り句などがとてもおもしろそうで、自分でもやってみればよかったと少し後悔している。とても楽しかった。(男)

○掛詞をうまくできるとうれしかった。(男)

○隠し題を使った和歌があり、とてもおもしろいなと思った。難しそうだと思ってあきらめてしまったので、次の機会があれば使ってみてみたいと思った。(女)

○和歌作りは楽しかった。修辞法をより多く取り入れたり、表現したりするのがとてもおもしろく、勉強になった。(男)

○同じような意味だけど、場面やニュアンスが違ったり、響きも考えて構成する必要があったりして、けっこう Feeling が大事だった。(女)

○和歌を作ることで、普段の授業よりも文法的な意味やどの言葉をどんな風に使うのかを意識することができた。自分の考えや気持ちに言葉を寄せていくのが楽しかった。(女)

○同じ場面を読んだ和歌でも、作った人の視点や感じ方で全く違う和歌ができることがよくわかった。登場人物の気持ちを自分なりに想像して、それに合う言葉を探すのはとても楽しかった。(女)

班ごとのグループワーク

○和歌を詠んだ人から話を聞けたので、和歌をうまく理解することができ面白かった。(男)

○複数の人で一つの和歌について意見をまとめつつ考えていくことは難しく、改めて話し合いの大切さを感じた。(女)

○自分が考えてきたものを班のみんなにほめてもらえてうれしかった。このようなグループワークはとてもおもしろく、意見の共有ができるので今後もやりたい。(女)

○もっといい言い回しがないかな、とみんなで探すことで古語についての理解を深めることができた

- なあと思う。縁語ではなるほど!と思うものが多く、おもしろかった。(女)
- 最初、わかんないなあと思って苦手意識があったけれど、皆の意見を聞くなかで楽しいな、ここはこうなるのかなと考えをふくらませることができ、有意義な取り組みができた。(女)
- みんなで一人の作った未完成の和歌を完成させていくことがとても楽しかった。また、十人十色な捉え方があって自分が知らない観点から学べた。(男)
- 最初は自分にも詠めるのかと不安でいっぱいだったが、班の子にアドバイスをもらうなどして、満足のいく作品を作り上げることができて、自信につながった。(女)
- もっといろんな班の子の意見も聞きたかった。同じ話をみんな読んでいるのにとらえ方、考え方の違いで全然違うように聞こえたりするので、和歌はおもしろいなあと思った。(女)
- もっとみんなで考える時間がほしかった。こんな感じの授業がもっとあっても良いと思う。(女)
- 一度作ってみた後に新しいアイデアが浮かんできたりするので、とてもおもしろかった。班のみんなで考えるのはとても貴重で楽しい経験だったので、よかった。後付けで修辭法が浮かんだり、班の人の、自分では考えられなかった意見が出たりして、とても奥が深いと思った。(男)
- 班のみんなで和歌の心情を考えて改善したりするのは楽しかった。(女)
- 今まで習ったことを班のみんなで共有したりすることで、古文の使い方をより深めることができた。(女)
- 人のつくったものの心情を読み取るのは大変だったけど、みんなで一つのものをつくるのは楽しかった。(女)
- いろんな視点の和歌があって自分では思いつかないような内容を共有して、よりよくして、という作業で新しい発見があっておもしろいと思った。(女)

#### 発表

- 発表を聞いていて、「そんな方法もあったのか!」と思った。(女)
- すごく難しかったけど、他の班の発表を聞いて納得できたりした。楽しかった。(女)
- 発表では他の人たちの修辭法の巧みさにとても感心したし、自分の知恵にもなってよかった。(女)
- 『伊勢物語』の感想の和歌もあったり、違う目線からの和歌があったり、いろんな和歌が聞けてとてもおもしろかった。(女)
- 自分が作った和歌は女の思いをそのままのせてしまったが、他の人の和歌を聞いていて、漢字にする意味、平仮名にする意味まで考えている人も多く、もっと考えを深く持つべきだったとあと後悔した。(女)

#### 授業者への希望

- もう少し構成の時間、考える時間がほしかった。(男)
- 和歌を作ることでグループ活動をしてたくさん意見が取り入れられて知識が広がるし、考えやすかったが、もう少しグループ内で添削や話し合いをする時間を設けてほしかった。(男)
- もう少し時間があればじっくり構成を練ることができたのに、と思った。(女)
- 例だったり、実際に現代の人がそういうことをやっているところの心情だったり、どういう風に作ったのかなど、身近なもので例えがあつたらもっとやりやすかった。(女)
- 通常の授業の方式の方が頭に入る。(男)
- 和歌を作るのは難しかったけど、完成したときの喜びも大きかったし、楽しかった。その分、数十分の話合いで推敲して読むのも申し訳なくて、もう少し深く話し合っておきたかったと思う。(女)

○アドバイスなどがもらえる時間がほしかった。(女)

○和歌を作る期間がもっと長かったらもっと深められたかも知れないとおもった。(女)

### 和歌・作品に対する理解

○見る人の視点を変えてみたり、イメージをふくらませたりと、他の人の和歌を聞いていておもしろかった。自分ももっとイメージを豊かになりたいなと思った。修辞法や文法を自分が理解できているかも、使ってみることで確認できた。(女)

○和歌のことを知りつつ、自分で作るということで、身近に感じられるようになった。(男)

○読解でちゃんと場面を理解できれば、創作時でも登場人物の気持ちになって書くことができるので、読解は大切だなと実感した。(女)

○百人一首が好きなので、好きな和歌の本歌取りをしてみたり、助詞や助動詞の意味や使い方を知れたり、皆で考えながら和歌を作るのが楽しかった。個人的には掛詞が一番好きで三十一音の短い中に、さらに思いを重ねられるところが好きです。(女)

○和歌にふれて和歌を読解することで和歌の深さ、おもしろさが分かった。(女)

○和歌を作るためにたくさんの和歌を読んだり、言葉を調べて新しいことを知ることができたので、とても楽しかった。以前は、授業だから、テストがあるからと和歌を読んでいてつまらなかったけれど、これからは興味が出たので楽しく読めそう。(女)

○自分で改めて和歌を詠み込むことで和歌やその文の真意を汲み取ることができて勉強になった。(男)

○他の『伊勢物語』も読んでみたい。(男)

○今までの古典の教材よりも「恋」というのをテーマにして作られていたので、とても興味深かったし、分かりやすかったので、楽しみ&ワクワクしながら授業を受けることができた。(男)

○『伊勢物語』自体がおもしろかったので読解の授業から楽しかった。和歌を作るのは人物の気持ちや物語の流れをより深く読まなくてはならなくて難しかったけど、人物の気持ちを理解すれば、いろいろな感情があることがわかったし、それを修辞法や文法を気にしながら作るのは楽しかった。(女)

○もっと上手な和歌が詠みたくなった。とても楽しかった。(女)

○物語を読むことでそれぞれの場面での登場人物の心情を読み取り、それを踏まえてオリジナルの和歌を創作できた。『伊勢物語』の和歌は感情があり、とても興味深かった。(男)

○授業では話に沿った見方しかできないけど、和歌を作ることによって『伊勢物語』をいろいろな方向から見ることができた。

○和歌があることで当時の人の考え方がわかったような気がして、和歌の必要性がわかった。(女)

○和歌はただ楽しむだけでなく、三十一文字の中にその人のたくさんの思いがあって、裏を読んだりすることがおもしろかった。和歌の見方が変わった。(男)

○掛詞がたくさんあると意味が増えて和歌を読むたびにどんどん込められた深さがわかって感心した。(女)

### 古典世界への興味・関心・理解

○『伊勢物語』は今のドラマなどのような展開もあって、昔のものなのに共感できた。人の心情は時の流れによってそうはかわらないものだと思った。心情を場面ごとに追って読んでいきたい。(男)

○和歌を創ることで個人個人の心情がとても風流に聞こえた。この季節(秋)にぴったりの授業だと思った。(女)

○昔の人たちの和歌に込める気持ちの奥ゆかしさも知れて、現代との違いをたくさん感じた。(女)

- 普段、さらっと読んでいた和歌も、自分で詠むとなるとすごく難しく、昔の人のすごさを改めて感じることができた。(女)
- 恋愛だったり、昼ドラのようなものが好きなのは今も昔も変わらないものなんだな、と思った。(女)
- 昔は今と違って感性が豊かで、気持ちを言葉にするときの言葉のバリエーションが豊富だと感じた。(女)
- 作ってみると昔の人の気持ちになったみたいで楽しかった。(男)
- 和歌を作るために、修辞法や時代の背景を調べられて楽しかった。(女)
- 作るにあたって、最初は漠然としていて何と書いていいかわからなかったが、たくさんの和歌に触れることで、自然と自分のいいたいことが和歌に込められていった。普段はない経験なので貴重で楽しかった。(女)
- 三十一音の言葉から、あんなにも多くのことを読み取ることができるのはおもしろかった。(女)
- 和歌を理解するのは古典の普通の文章よりも難しかったけど、昔の人の心や思いが直に伝わってくるようでとても楽しかった。(女)

#### 文法・修辞への理解・認識の変化

- 自分で創るにあたり、より深く修辞法を知ることができた。特に私は助動詞のことを深く知れた。授業中ではなんとなく分かっていても自分で作るとなると自分で意味を知っておかなければならないので、「そういう意味もあるのか!」と新しい発見もあった。(女)
- 修辞法などを使って実際に書いてみると技法を覚えることができるので、勉強になった。(女)
- 修辞法や古語をもっと知った上で、表現したい心情に最もあったものを選ぶべきだと思った。(男)
- 文法事項について発表することで自分で理解できた。(男)
- 文法的事項を、普通に習うよりも、自分で使ってみる方がより自分の中に入ってきた。すごくあうおもしろかった。
- 文法的なものも何か印象づくものと一緒にやった方が覚えやすいので、今回のようにがんばって古語で和歌を作るのはいいことだと思う。(女)
- 修辞法をうまく使うことで、自分が考えたことをうまくまとめることができることを知ったが、助詞・助動詞を使うことが難しかった。(男)
- 作るのは難しくて、夢の中まで和歌のことを考えてしまったりしたけれど、どんな修辞を使おう? 掛詞にできないかな? といろいろ考えているうちに楽しくなってきた。また作ってみたい。(女)
- 和歌を作ることによって作品に対する自分の考えや風景を表すことができるのがよいと思った。(男)
- 自分でいろいろ調べながら作るので、修辞技巧や文法の復習をすることができた。(女)
- 修辞技巧や古典文法を使うことで作品により深みや味が出るので、考えるのはとても楽しかった。(女)
- いろいろな修辞法の中でも、掛詞はいろんな場面を一つの語で連想させる力を持っていて、和歌をさらに奥深くできるなと思った。(女)

#### 4 まとめ

##### (1) 国語科学習を通して、他教科への活用・社会人として必要な国語力の育成

国語科以外の教科・活動・領域でも、言語に関する能力の育成（言語活動の充実）が求められている。アクティブ・ラーニング等、生徒が主体的に学び、探究に向かう道筋を支援するためのしかけとして、どのようなことが考えられるのか。国語科に求められて役割と責任を真摯に受け止め、授業内容を充実させていく必要がある。

(2) 「習得」「活用」を重視した系統的・段階的な学習過程—基礎・基本から楽しく、全員に学力保証を—  
従来、現代文の分野で実践していた「五段階の学習過程」で学習を進め系統的に「受信」から「発信」そして「評価」までの学び方を身につけさせることができた。基礎・基本学習といった「習得型」学習を活かした上で、和歌の創作を通して国語の能力の基礎を系統的・段階的に育成できたと考えられる。

(3) 学びの履歴・記録、読解から考え・解釈、批評へのステップ—学習シートの開発・活用—

学習シートの開発・活用により学びの過程とつまづき、到達度等を可視化することで「何をどう学習すればいいのか」が明確になり、学習意欲が向上し、学習の仕方も身につけさせることができた。また、同じ様式のシートを共有することで、個々の作品の主題の理解や表現の工夫について共通の認識をもった上で、話し合いを円滑に行うことができた。

一方で、評価のあり方について、当日ご参加の先生方から疑問の声や厳しいご意見も伺った。ルーブリックによる評価も検討したが、和歌の創作が基本となる授業では、評価基準を事前に細かく提示することで、型にはまった創作活動に陥る危険も無視できない。それゆえ、今回は作品の評価基準の概要にとどめたが、不十分な面があったことは否めない。「独創性はルーブリックで評価することがなかなか難しいのが現状」(松下佳代 2013)であり、今後の課題としたい。

## 5 主な参考文献

- (1) 西辻正副「高等学校国語の指導の改善(1)～(38)」(『中等教育資料』2008年3月～2012年7月)
- (2) 佐藤洋一「国語科言語力の『三層構造』の明確化」(『現代教育科学』明治図書 2008年11月)
- (3) 日本言語技術教育学会編『言語技術教育21 新教材・伝統的な言語文化をどう授業化するか』(明治図書 2013年)
- (4) 佐藤洋一・有田弘樹「伝統文化(古典)における『習得・活用』の授業開発 - 『竹取物語』のテキスト形式をめぐって - 」(『愛知教育大学研究報告 第61輯』2012年3月)
- (5) 福井貞助校注・訳『日本古典文学全集12 竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』(小学館 1994年)
- (6) 秋山虔校注『新日本古典文学大系17 竹取物語 伊勢物語』(岩波書店 1997年)
- (7) 渡邊実校注『新潮日本古典集成 伊勢物語』(新潮社 1976年)
- (8) 永井和子訳・注『伊勢物語』(笠間書院 2008年)
- (9) 大津有一校注『伊勢物語』(岩波文庫 1964年)
- (10) 坂口由美子編『伊勢物語』(角川ソフィア文庫 2007年)
- (11) 石田譲二訳注『新版伊勢物語』(角川ソフィア文庫 1979年)
- (12) 阿部俊子全訳注『伊勢物語(上)、(下)』(講談社学術文庫 1979年)
- (13) 雨海博洋『文法全解伊勢物語』(旺文社 1996年)
- (14) 片桐洋一・後藤明生『新潮古典文学アルバム5 伊勢物語・土佐日記』(新潮社 1990年)
- (15) 倉本由布『21世紀に読む日本の古典3 竹取物語・伊勢物語』(ポプラ社 2001年)
- (16) 千野浩一「近世文学作品の導入教材としての可能性」(『国語と国文学』2015年11月)
- (17) 松下佳代「学習成果の評価の現状と課題」(「河合塾 Guideline」2013年4月)



【付記】『国語総合』の新しい役割と位置、テキスト形式論の観点から古典教材を扱う視点、独自の学習シート開発と活用による授業改善等については共同研究者・佐藤洋一愛知教育大学教育学部教育実践講座教授のご助言を得た。

伊勢物語 修辞法を用いた和歌を詠む① 一年( )組( )番( )

(○)和歌の修辞法をより深く理解するため、自分たちで修辞法を用いた和歌を詠んでみよう。  
 「芥川」「あつたろ」「栗下り」の中で最も印象的だった場面について、主題にらわれわしう歌を作ってみよう。

☆☆ルール☆☆

「枕詞」「序詞」「掛詞」「縁語」「体言止め」「本歌取り」「物名」「折の句」「題詞」等の中から、必ず一つ以上の修辞法を用いること。一番伝えたいことが、より効果的に伝わる工夫を目標とする。  
 ※詳しくは『完成古典文法』p142と、『最新国語便覧』p104を参照しよう。

現代語で詠んでもいいが、できる限り、古典文法の助動詞・助詞、係り結びなどを用いてほしい。

自分の詠んだ和歌 (選んだ場面は... )

和歌の解釈(現代語訳、どうしてこの歌なのかのわかりやすく説明する。)

- 1 要するに、何を伝えようとした和歌なのか、キーワードで簡潔に説明する。  
 (例 恋しても報われないからと一途に思い続けるせつなな\*感動や伝えたいことの中心)
- 2 その和歌に選ばれている場面(情景)、自然・風景や具体物、イメージは何か。  
 (例 のち赤れ<sup>あか</sup>女<sup>に</sup>鳥<sup>の</sup>たつ屋<sup>の</sup>築<sup>に</sup>ひて足<sup>の</sup>乳<sup>の</sup>母<sup>は</sup>死<sup>に</sup>たま<sup>ら</sup>ぬ<sup>の</sup> 齊藤 敦  
 ☆母の臨終というシーンにもつむい哀しみを伝えるために、生きて未来があるつかいの玄鳥の「赤」=生命力・命、臨終の「母の白い顔」の対比(色彩の象徴、対比)、母の横たわる布団や床と屋敷にいる鳥の立体的空間、視線の動きの効果等\*二つか三つでよい)

修辞法の説明(自分が和歌に用いた修辞法を説明する。 ※説明の仕方は、教科書p10脚注①を参考に。)

伝えるために、効果的で説得力のある修辞が使われているか。工夫したことは何か。  
 (例 色彩の象徴性、対比の効果、空間の設定、時間の重層性、繰り返し...など)  
 自分らしいところ、わかってほしい良い点はありますか。  
 (その人らしい和歌の情景や、人間的なところ)

今後、主題・内容、修辞法の使用数、修辞法の巧みさ、助動詞・助詞の使用、発表の仕方などの観点から、作品を評価していきます。これらの評価基準を意識して作ろう。

・・・ここまでは宿題です。各自で、うろくで指定された締め切りまでに、完成させてください。  
 【今後の予定】

- ①うろくでら入班に分かれて、作品を発表し合う。その後班で一言を選び、それを皆で推敲する。(1時間)
- ②班ごとにうろくの形で作品を発表し、解説する。観客は作品や発表を評価し、優勝作品を決める。(1時間)

伊勢物語 修辞法を用いた和歌を詠む② 一年( )組( )番《 》班( )

- (1) 班に分かれて、各自の和歌を発表し行おう。(自作の朗詠、解釈・修辞法の説明。)(一人あたり2分程度)
- (2) 班で、一番優れた(アポイントした)作品一首を選ぼう。
- (3) 選んだ歌をさらによんでみようか。改善の視点・理由も述べて…班全員で考えてみよう。  
(例)掛詞・縁語を増やせないか、古典文法の助動詞を使えないか、なし。評価基準を参考に。

班で選んだ和歌

和歌の解釈(現代語訳、しつらつ凶器の歌なのかわかりやあし説明する。)

1 要するに、何を伝えようとした和歌なのか、キーワードで簡潔に説明する。  
(例 恋しくても報われないうらや 一途に思い続けるせつなな\*感動や伝えたいことの中心)

2 その和歌に選ばれている、風景や具体物、イメージは何か。  
(例 のち柄老 玄囀らたつ屋敷にゆき皮新ねの母せ死にたまらなり 花藤枝扣  
☆母の臨終という場面も哀しみを伝えるために、生きて未来があるつかいの玄鳥の「赤」=生命力・命、臨終の「母の白い顔」の対比(色彩の象徴、対比)、母の横たわる布団や床と屋敷にいる鳥の立体的空間、視線の動きの効果等\*一二つか三つでよめている。)

修辞法の説明(和歌に用いた修辞法を説明する。)

伝えるために、効果的で説得力のある修辞が使われているか。工夫を感ずる所は何か。  
(例 色彩の象徴性、対比の効果、空間の設定、時間の重層性、繰り返し…なし)

(4) 次回、クイズの形で発表するための役割分担・準備をしよう。【発表時間は一班5分】

- ①和歌を紹介し朗詠する係 ②解釈・現代語訳し、主題を説明する係 ③歌に選ばれている風景やイメージを説明する係 ④表現技法や文法を説明する係 ⑤その人らしい歌の改善点を指摘する係 なし
- など。発表の仕方各班で工夫しよう。

メモ

1 ( )をやらしうらや、暇は夜眠つられもしたか。  
(その人らしい和歌の言葉や、人間的なもの)

2 自由に気づいたことを書きましよう。

推敲した和歌

伊勢物語 修辞法を用いた和歌を詠む③ 一年( )組( )番《 》班( )

(5)それぞれの詠んだ和歌を発表しよう。【一人2分以内】

歌の主題・内容、用いている修辞法、和歌文法などわかるいやあし発表しよう。

(6)観望は、発表を聞いた後、各項目ごとに和歌を評価しよう。【1分程度】

氏	番	和歌の主題・内容	5	4	3	2	1	点
		内容がよくなる	5	4	3	2	1	
		修辞法の巧みさ	5	4	3	2	1	
		助動詞・助詞の使用	5	4	3	2	1	
		発表の仕方	5	4	3	2	1	

氏	番	和歌の主題・内容	5	4	3	2	1	点
		内容がよくなる	5	4	3	2	1	
		修辞法の巧みさ	5	4	3	2	1	
		助動詞・助詞の使用	5	4	3	2	1	
		発表の仕方	5	4	3	2	1	

氏	番	和歌の主題・内容	5	4	3	2	1	点
		内容がよくなる	5	4	3	2	1	
		修辞法の巧みさ	5	4	3	2	1	
		助動詞・助詞の使用	5	4	3	2	1	
		発表の仕方	5	4	3	2	1	

氏	番	和歌の主題・内容	5	4	3	2	1	点
		内容がよくなる	5	4	3	2	1	
		修辞法の巧みさ	5	4	3	2	1	
		助動詞・助詞の使用	5	4	3	2	1	
		発表の仕方	5	4	3	2	1	

氏	番	和歌の主題・内容	5	4	3	2	1	点
		内容がよくなる	5	4	3	2	1	
		修辞法の巧みさ	5	4	3	2	1	
		助動詞・助詞の使用	5	4	3	2	1	
		発表の仕方	5	4	3	2	1	

氏	番	和歌の主題・内容	5	4	3	2	1	点
		内容がよくなる	5	4	3	2	1	
		修辞法の巧みさ	5	4	3	2	1	
		助動詞・助詞の使用	5	4	3	2	1	
		発表の仕方	5	4	3	2	1	

感想・おしり

伊勢物語 修辞法を用いた和歌を詠む④ 一年( )組( )番《 》班( )

(7) 班ごとに詠んだ和歌を発表しよう。【一班5分以内】

歌の主題・内容、用いている修辞法、古風文法などをはかりのやまへ発表しよう。

(8) 観客は、発表を聞いた後、各項目ごとに和歌を評価しよう。【1分程度】

班	和歌の主題・内容	5	4	3	2	1	合計
	内容がよく伝わる	5	4	3	2	1	
	修辞法の巧みさ	5	4	3	2	1	
	助動詞・助詞の使用	5	4	3	2	1	
	発表の仕方	5	4	3	2	1	

班	和歌の主題・内容	5	4	3	2	1	合計
	内容がよく伝わる	5	4	3	2	1	
	修辞法の巧みさ	5	4	3	2	1	
	助動詞・助詞の使用	5	4	3	2	1	
	発表の仕方	5	4	3	2	1	

班	和歌の主題・内容	5	4	3	2	1	合計
	内容がよく伝わる	5	4	3	2	1	
	修辞法の巧みさ	5	4	3	2	1	
	助動詞・助詞の使用	5	4	3	2	1	
	発表の仕方	5	4	3	2	1	

班	和歌の主題・内容	5	4	3	2	1	合計
	内容がよく伝わる	5	4	3	2	1	
	修辞法の巧みさ	5	4	3	2	1	
	助動詞・助詞の使用	5	4	3	2	1	
	発表の仕方	5	4	3	2	1	

班	和歌の主題・内容	5	4	3	2	1	合計
	内容がよく伝わる	5	4	3	2	1	
	修辞法の巧みさ	5	4	3	2	1	
	助動詞・助詞の使用	5	4	3	2	1	
	発表の仕方	5	4	3	2	1	

班	和歌の主題・内容	5	4	3	2	1	合計
	内容がよく伝わる	5	4	3	2	1	
	修辞法の巧みさ	5	4	3	2	1	
	助動詞・助詞の使用	5	4	3	2	1	
	発表の仕方	5	4	3	2	1	

班	和歌の主題・内容	5	4	3	2	1	合計
	内容がよく伝わる	5	4	3	2	1	
	修辞法の巧みさ	5	4	3	2	1	
	助動詞・助詞の使用	5	4	3	2	1	
	発表の仕方	5	4	3	2	1	

☆ 一位( )班 二位( )班 三位( )班 四位( )班 五位( )班 六位( )班 七位( )班

感想・おしめ

『伊勢物語』 修辞法を用いた和歌を詠もう 組 番 ( )

自己評価してみよう

★それぞれの項目について、あてはまるものに○をつけましょう。

登場人物・場面設定・構成を把握して歌を詠むことができた。	はい まあまあ あまり いいえ
和歌に込められた心情・内容を他の人と共有することができた。	はい まあまあ あまり いいえ
和歌の修辞法について理解することができた。	はい まあまあ あまり いいえ
和歌に対する意識を高めることができた。	はい まあまあ あまり いいえ
作品の主題を理解することができた。	はい まあまあ あまり いいえ
作品に対して自分の立場からの意見・考えを持つことができた。	はい まあまあ あまり いいえ

★和歌の創作について意見・考えを自由に書いてください。

★『伊勢物語』の読解から和歌の創作発表までの授業活動について感想などを自由に書いてください。